

古き良き石の 文化の復活

軟石の復活

「私たちの誇りである軟石をまちづくりで生かしたい」。そんな気持ちを抱いていた石山区の人々の活動が本格化したのは平成七年のことです。

「採掘場跡の景観を生かした公園『石山緑地』の完成が近づいていたことが理由の一つとしてありました」と当時を振り返るのは、石山区町内会連合会会長の福士昭夫さんです。

この年、同連合会とまちづくり団体が石山の街を貫く旧国道の愛称を住民から募集。この道は「石切山街道」と名付

けられ、同年十一月には軟石で造られた石碑が建てられました。

翌年には、同連合会の女性部が石山緑地に軟石のモニュメントを寄贈し、コンサートを開催。開催に当たっては、住民からたくさん寄付や応援の声が寄せられたと言います。

石山緑地芸術祭

軟石を生かしたまちづくりへの期待が高まる中、四つの町内会連合会石山芸術の森藻岩、藻岩下」と石山の商店街、まちづくり団体らによる「石山緑地芸術祭運営委員会」が設立されたのは、平成九年四月のこと。石山区だけではなく、近隣の町内会組織との幅広い協力体制を取る

ことにより、地域への波及効果があります。高まったそうです。

「地域の人々に優れた舞台や演奏を気軽に楽しんでもらいたかった」と語るのは石切山街道まちづくりの会代表の岩本好正さん。同年八月に開催された第一回芸術祭の初日には、道内ではなかなか見ることができない新能を上演。収容人員約三千五百人の会場に四千人も観客が訪れ、関係者を驚かせたと言います。

芸術祭では、その後も市内の芸術文化団体に出演を呼び掛けるなど、毎年工夫を凝らしながら着実に活動のすそ野を広げています。また、開催に当たって忘れてはならないのが地元ボランティア

ティアの皆さんの活躍です。会場案内など、まちぐるみで芸術祭を支えてくれています。

「芸術祭の成功をきっかけに地域の連帯感がより一層強まりました。この活動を通じて、もっと多くの人々に石山を訪れ、まちのシンボルである軟石の歴史や文化、そして私たちのまちの良さに触れてもらいたい」と語る福士会長。

将来は、軟石や石山の歴史を解説するボランティアの育成をはじめ、札幌軟石で造った建物を所有する人々とのネットワーキング作りなども考えていると言います。地域の宝である文化遺産を有効に活用し、育成・発展させながら新たなまちづくりを目指す。そんな石山区の取り



むかし話

昔の石工たちでつくる「札幌軟石・石工友の会」
しげやみつお
事務局長 渋谷光男さん(75歳)

「最盛期の大正から昭和の初めにかけては、石工が500人以上はいたかな。彼らの多くは石工の仕事で生計を立てていたけど、中には農家の副業として働いている人もいたよ。

昔は機械なんてないから、採掘はすべて手掘り。力仕事だし、がけ地での作業が多くて危険だったけれど、給料が出来高制だったので、みんな日の出から日の入りまで一生懸命働いていたね。

冬は、採掘場で表土(火山灰)を取り除く作業をしたり、市内の除雪作業をしたりして、生活費を稼いだもんだよ。

また、毎月1日は、石屋がお休みで石工の仕事も休み。だから小学校の運動会は毎年6月1日と決まっていたんだ」



札幌軟石・石工友の会の皆さん。
左から地藏守さん、小原正治さん、渋谷光男さん



昭和初期の採掘場の様子
写真は、当時16歳ころの地藏さん



「石切山街道」の石碑。南区のまちづくり事業の一環として設置されました



石山緑地芸術祭は毎年八月に開催されます。ローマの古代遺跡を思わせる幻想的な雰囲気の中、新能をはじめ、和太鼓、吹奏楽、スペイン舞踊など、毎年さまざまな芸能が披露されています